

初夏の空で笑う女

小川未明

青空文庫

あるところに、踊^{おど}ることの好^すきな娘^{むすめ}がありました。家^{いえ}のうちに
 いてはもとよりのこと、外^{そと}へ出^でても、草^{くさ}の葉^はが風^{かぜ}に吹^ふかれて動^{うご}く
 のを見^みては、自分^{じぶん}もそれと調^{ちようし}子を合^あわせて、手^てや足^{あし}を動^{うご}かした
 り、体^{からだ}をしなやかに曲^まげるのでした。

また、日^ひの輝^{かが}く下^{した}の花^{はな}園^{ぞの}で、花^{はな}びらがなよなよとそよ風^{かぜ}にひ
 らめくのを見^みると、たまらなくなつて、彼^{かの}女^{じよ}は、いっしよにな
 つてダンスをしたのであります。

両^{りよう}親^{しん}は、自分^{じぶん}の娘^{むすめ}をもてあましてしまいました。母^{はは}親^{おや}は、

ダンスなどというものは、きらいでありましたから、

「もう、これほどまでいって、それでも聞^きかないで、踊^{おど}りたいな

ら、おまえは家うちにいないほうがいいから、かつてにゆきたいところへいつて、踊おどりたいだけ、踊おどつたらいい。」と、母親はおやはいいました。

母親はおやは、娘むすめに裁縫さいほうを教おしえたり、また行儀ぎようぎを習ならわしたりしたいと思おもつたからです。けれど娘むすめは、それよりか、自分じぶんかつてに踊おどりたかつたのであります。

「お母さんかあ、私わたしは、もつと旅たびへいつて、踊おどりのけいこをいたします。そして、それで身みをたてたいと思おもいますから、どうぞ、お暇ひまをください。」と頼たのみました。

両親りょうしんは、いつか、娘むすめが自身じしんで氣きがつくときがあるであろうと思おもつて、涙なみだながらに、それを許ゆるしました。

娘は、あるときは、雲くもの流ながれる方ほうへ向むかつて歩あるいていきました。
 また、あるときは、水みずの流ながれる方ほうへ向むかつて、旅たびを続つづけました。
 そして、白壁しらかべや、赤あかい煉瓦れんがなどの見みえる、気持きもちのいい町まちへ着つきました。

彼女は、町まちの中なかを歩あるいていますと、小ちいさな劇げき場じょうのような
 ところがあつて、そこには美うつくしい花はなの飾かざりがしてあり、旗はたなどが
 立たててありました。そして、看かん板ばんに、「どなたでも、踊おどりたい
 と思おもう人ひとは、踊おどりなさい。歌うたいたと思おもわれる人ひとは、歌うたいなさい。
 そのかわり、上じょう手ずでなければ、人ひと々びとが笑わらいます。」と、書かい
 てありました。

彼女かのじよは、この劇げき場じょうの前まえに立たって考かんえました。

「踊^{おど}りたいには、踊^{おど}りたいが、上手^{じょうず}に踊^{おど}れるだろうか？ 下手^{へた}に踊^{おど}つて、人々^{ひとびと}から笑^{わら}われやしないだろうか？」

しかし、彼女^{かのじよ}は、べつに頼^{たよ}つていくところのきまつた身^みでもありませんから、上手^{じょうず}、下手^{へた}はそのときの運命^{うんめい}と思^{おも}つて、とにかく出^でて踊^{おど}ることにしました。

彼女^{かのじよ}は、みんなの前^{まえ}で踊^{おど}りました。

「草^{くさ}の葉^はの踊^{おど}り」

「赤^{あか}い花^{はな}のダンス」

こうした、二つ^{ふたつ}の踊^{おど}りは、みんなに不思議^{ふしぎ}な感^{かん}じを与^{あた}えました。みんなは、喜^{よろこ}びました。拍^{はく}手^{しゅ}しました。彼女^{かのじよ}は、あたかも、なよなよと草^{くさ}の葉^はが風^{かぜ}にもまれるように、柔^{やわ}らかに体^{からだ}を波打^{なみう}たせ

て踊おどりました。また、真紅まつかに咲さき乱みだれた花はなが、風かぜに吹ふかれて、いまにも散ちりそうなようすを、手てを振ふり、足あしを動うごかし、体からだをひねつて、してみせたのであります。

「なんというおもしろい踊おどりだろう……。」と、みんなは口々くちぐちにいいはやしました。

ここに、金持かねもちのお嬢じょうさまがありました。お父とうさんや、お母かあさんは、たくさんのお金かねを残のこして、この世よの中なかから去さられたので、お嬢じょうさまはりっぱな、大おおきな家いえになに不自由ふじゆうなく、独ひとりで暮くらしていられました。

このお嬢じょうさまが、ちようど劇場げきじょうにきて、娘むすめの踊おどりを見みていられましたが、踊おどりばかりでなく、この娘むすめがたいそう気きにいられ

ました。

「おまえさんは、わたしの家へきませんか。」と、お嬢さまは、踊りが終わると、娘にあつて話されました。娘はお嬢さまに向かつて、

「わたしは、ただ踊りたいのです。私を自由に踊らせてくださればまゐります。」といいました。

「わたしは、おまえさんから、その踊りを習いたいのですから、そんな、気兼ねはすこしもありません。」と、お嬢さまは答えられました。

娘は、その日から、お嬢さまの家へ住むことになりました。お嬢さまの家は、りっぱなお家でした。そして、青い着物をき

た、もう一人美しい娘がいました。その娘は、いい声で一日唄を歌うたっているのです。

「この娘むすめさんは、おまえさんと異ちがって歌うたうことが好きなんです。

それで、こうして、好きな唄うたをうたっているのですよ。おまえさ

んは、今日きょうからかつてに、この家で踊おどりなさるがいい。」と、お

嬢じょうさまは、いわれました。

むすめ

じゆう

おも

なが

娘むすめは、自由なところだと思いました。そして、はじめて、長いあいだのぞ間の望みがかったように思いました。いい声で、歌うたっていた少

ようじよ

女むすめは、ぶどうのような、うるんだ目めでじつと、新しく、ここ

へきた娘むすめを見ながら、

「あなたは、草くさの葉はや、赤あかい花はなから、踊おどりを教おそわったとお姉ねえさま

から聞ききましたが、私わたしは、また唄うたを小鳥ことりから、あのみみずから：
 風かぜから、いろいろなものから習ならいましたの。私わたしは青あおい着物きものを着き
 て、こうして歌うたっていると、ちようど自分じぶんが小鳥ことりのような氣きがし
 て、それは、うれしいんですよ……。」

青あおい着物きものの少しょう女じよが、お嬢じようさまを姉ねえさんといいますので、彼か
 の少しょう女じよもまた、お嬢じようさまのことを姉ねえさんということにしました。

この唄うたを歌うたうことの好すきな少しょう女じよは、やはり自分じぶんの家うちにいる
 時分じぶん、朝あさ晩ばん、歌うたっていましたので、唄うたをきらいな、氣きむずかし
 いお父とうさんは、娘むすめをしかつて、どこへでもいつてしまえといいま
 した。それで少しょう女じよは、泣なく泣なく家いえを出でて、やはり、この町まちに
 やつてきました。そして、劇げき場じようの前まえを通とおりますと、

「歌うたいたいいものは、だれでも、はいって遠慮えんりよなくうたいなさい。まずければ、人ひとに笑わらわれます。」と、このときも、看板かんばんに書かいてありました。

少しょう女じよは、こずえに止とまつて、小鳥ことりが自由じゆうにさえずるとききの姿すがたを思おもひ出だしました。また、夏なつの晩方ばんがた、眠ねむそうに、唄うたを歌うたつているみみずの節ふしを思おもひ出だしました。それが、みんなの喝采かつさいを博はくしました。このときも、お嬢じようさまは、こここにきていて、この少しょう女じよの唄うたを聞きかれました。そして、少しょう女じよをお家うちへつれて帰かえられたのでした。

「花はなの踊おどりには、赤あかい着物きものを着きるといい。」と、お嬢じようさまはいつて、この踊おどりの好すきな娘むすめには、美うつくしい花弁はなびらのような着物きものを、造つく

つてくださいました。

その日ひから、家うちの中で、青あおい着物きものの少女しょうじよはうたい、赤あかい着物きものの娘むすめは、花はな弁びらの風かぜに吹ふかれ狂くるうごとく踊おどるのであります。

ある日ひのことです。りっぱな、お嬢じようさまの馬車ばしやが門もんの前まえに止とま

ると、お嬢じようさまは、黒くろ髪かみを両り方ようほうのふくよかな肩かたに乱みだした、

半裸はんらたい体わかの若い女おんなをつれて、お家うちの中なかへはいられました。

青あおい着物きものの少女しょうじよも、赤あかい着物きものの娘むすめも、この怪あやしげな女おんなを見

て、目めを円まるくしてびつくりしていました。

「この人ひとは、魔術まじゆつ使つかいなよ。今日きようから、この家うちで、いつしよ

に暮くらすことになったの。」と、お嬢じようさまは、驚おどろいている二人ふたりに

向むかつていわれました。

くろめが 黒目勝ちな、唇くちびるの赤い、眉まゆの濃こい、髪かみの長ながい女おんなは、黙だまって、二ふ人たりむに向むかつて頭あたまを下げました。魔術まじゅつ使つかいの女おんなは、おしなのでした。

「おまえさんには、黒くろい着物きものがよく似合にあうようだ。」といつて、お嬢じょうさまは、魔術まじゅつ使つかいの女おんなには、黒くろい着物きものをきせました。

その女おんなは、なんでも、魔術まじゅつをインド人じんから教おそわったというこ

とです。人間にんげんをはとにしたり、からすにしたり、また、はとを皿さらにしたり、りんごにしたりする不思議ふしぎな術じゅつを知しっていました。

いままで、いい声こえで歌うたっていた青あおい着物きものの娘むすめが、魔術まじゅつにかかつてからすになったり、いままで赤あかい着物きものをきて踊おどっていた娘むすめが、たちまちの間あいだにはとになるかと思うと、美うつくしい、華はなやかな着物きものを

きて、笑^{わら}つて、それをばごらんになつていたお嬢^{じよう}さままでが、どこへか姿^{すがた}が消^きえてしまつたり、最後^{さいご}に、魔術^{まじゆつか}使い自身^{じしん}も、白^{しろ}い煙^{けむり}をたててなくなつてしまつたりするかと思^{おも}うと、目^めの前^{まえ}へ一本^{ぽん}の草^{くさ}が芽^めを出^だし、それがすぐ大^{おお}きくなつて花^{はな}が咲^さき、その中^{なか}から人^{にんげん}間^うが生^うまれる——それが、お嬢^{じよう}さまであつたり、また、はとが、生^うまれかわつて箱^{はこ}の中^{なか}から出^でるときは、いつのまにか、赤^{あか}い着^き物^{もの}をきた娘^{むすめ}になつたりするような、それは不思議^{ふしぎ}なことばかりでありました。

「もつとおもしろいなにか芸^{げい}をする娘^{むすめ}さんたちが、集^{あつ}まつてこないものかね。」と、お嬢^{じよう}さまは、その後^ごも劇^{げき}場^{じよう}へいつてみられたけれど、それから出^でた女^{おんな}は、平^{へい}凡^{ぼん}なものばかりでした。

「お姉さま、きつと旅に出たらおもしろいことがあると思います
。」と、青い着物をきた少女がいました。

「わたしも、そんなことを思っていたのよ。もうこの町の生活
にも飽きましたから、四人が旅へ出て、ゆくさきぎきの劇場
で、私たちの芸をしてみせたら、かえっておもしろいかもしれな
い。」と、お嬢さまはいわれました。

そこで、四人は、旅へ出たのであります。そして、ゆくさきぎ
きでいろいろの芸をしてみました。四人の年若い女たちは、い
ずれも美しい顔で、見る人々をうつとりとさせました。中
でも男たちは、かつて、こんなに美しい女を見たことがないとい
つて、感歎しました。そして、まれには、結婚を申し込んでくるも

のもありましたけれど、四人は、けつして、それらの人たちには、
 取り合いませんでした。魔術使いの女はおしではありましたけ
 れど、顔のどこかに、いちばん多く人を魅する力をもっていまし
 た。

夏のはじめになると、北国の海は青々として冴えていまし
 た。彼女らは、この海岸の小さな町にはいつてきて、その
 劇場で踊ったり、歌ったり、また魔術を使ったりしてみせ
 ました。まだまったく開けていない土地の人々だけに、どんな
 に驚いた目つきをして、この美しい女たちをながめたであいまし
 よう。

「真つ赤な着物をきて、花のように踊る。」といつて、喜びまし

た。

「あの黒くろい着物きものをきた女おんなは、なんというすごいほど美しい女うつく おんなだろ
う。そして、魔術まじゆつを使うつか。」といって、驚おどろいてうわさをしまし
た。

また、町まちの男おとこも、女おんなも、美しいお嬢じようさまについて、また、風かぜの
あたる緑みどりの林はやしを思おもわせるような、唄うたを上手じようずに歌うたう少女しょうじよにつ
いて、いろいろの評判ひようばんをしました。そのうちに、彼女かのじよらは、
この小ちいさな北国ほつこくの町まちにも別わかれを告つげて、遠とおい西にしの国くにを指さして、
旅たび立たなければならぬ日ひがきました。

彼女かのじよらの、この町まちを去さつてしまうということは、楽たのしみと色し
彩きさいに乏とほしいこのあたりの人々ひとびとに、なんとなくさびしいことに

感じられたのであります。そこで、いよいよその日がくると、若
 者たちは、外に出て彼女らの立つのを見送っていました。
 四人の美しい女たちは、赤い馬車に乗りました。赤い馬車は、
 青い海を左手にながめながら、海岸を走っていったのであり
 ます。

初夏の光に照らされて、その赤い馬車は、いつそう鮮やかに、
 色が冴えて見られました。そして、青い海の色と反映して、美
 しかったのでした。馬車は走って、走っていきました。海岸の
 道は、しだいにけわしくなりました。

一方は山で、切り落としたようになって、一方は深い深い崖で
 あります。その崖の下には、大きな波が打ち寄せていました。

赤い馬車は、どう誤ったものか、勢いよく走つてゆくと、その
 崖からまっさかさまに海の中へと四人の女たちを乗せたまま落ち
 てしまいました。そして、いままで、赤く火の燃えついたように、
 走つていった馬車の影は、もはや、どこにも見えませんでした。
 太陽は、そのことを知つてか、もしくは知らずにか、すこしの
 変わりもなく、白い道を照らし、青い海の面を照らしていました。
 たまたま、馬車が崖から落ちたのを見ていたものがあつて、大
 騒ぎになりました。人々はそこへいつてみました。けれど、
 馬も、人も、また赤い箱も、なにひとつ名残をとどめていないの
 で、みんなはそのことをはなはだ不思議に思いました。
 「魔術使いの乗っている馬車だから、どんな魔術を使つて、

姿を消したのかもしれない。」といったものもありました。

その後、この話は、この海岸の不思議な話となりました。

暗い晩に、北国の海を航海する船が、たまたまこのあたり

を通りますと、どこからともなく、若い女の歌う声が、聞こえて

くることがあるといいました。また、ある漁船は、夜、雨の降

る中をさびしくこいでいると、あちから一そうの小舟がやつて

きて、音もなくすれちがう。その舟の中には、赤い着物をきた女

がただ一人すわって、泣いているのを見たというものもありまし

た。

毎年、初夏のころのことです。この海岸に、蜃

気楼が浮かびます。赤い着物をきた女が踊り、青い着物をきた

女おんなや、黒くろいからすの影かげなどが、空そらに見みえるかと思おもうと、しばらく
 して、消きえてしまい、晴はれわたった、輝かがやかしい太たい陽ようの下したで、顔かお
 も形かたちも見みえないで、女おんなの笑わらう声こえがきこえる……。こんな神しん秘ひ的てき
 な現げん象しょうをこの海かい岸がんの人ひと々びとは、いままで幾いくたびも見みたり、
 聞きいたりしたということです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集1」丸善

1927（昭和2）年1月5日発行

初出：「童話」

1925（大正14）年5月

※表題は底本では、「初夏《はつなつ》の空《そら》で笑《わら》う女《おんな》」となっています。

※初出時の表題は「初夏の空で笑ふ女」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2019年6月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初夏の空で笑う女

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>